ARTICLE

社会教育関係職員のキャリア形成
―経験と満足度―

放送大学教授　岩崎久美子

はじめに

キャリアと呼ばれる人生の道筋は誰にも予想がつかないものである。クランボルツの「計画された偶発理論」(Planned Happenstance Theory) によれば、キャリアは偶然の出来事によってほぼ決まるとされる。とはいえ、偶然のように見えたキャリアが自分の意識の奥深くに潜む経験に紐づいているということもある。あるいは偶然の出来事を引き寄せるように自分の望む方向に向けて努力することでキャリアが展開していくこともあろう。

これまで仕事上で、青少年教育関係者、社会教育主事、あるいはＮＰＯの人など、社会教育の領域で仕事をする魅力的な人々に接することがあった。公民館講座の講師として釣った魚をさばき山菜を取った後の料理の仕方を教えた話やコミュニティハウスを運営し地域の人材を発掘する姿など、人々と交流し生き生きと活動している話や姿は温かさを伴うもので心に深く残っている。また、ある自治体を訪問した折には、社会教育行政担当者は地域のスポーツ大会などで挨拶することなどを通じ地域の人々と接す中で小さな市町村では首長になる人が多いとの話も聞いた。

このような社会教育に従事する様々な職種や立場の人を社会教育関係職員と呼称すれば、これらの人々はどのような経験を経て現在のキャリアに至ったのか、そして現在の職業からどのような経験を得ているのかということに関心を抱くようになった。ここではそのような思いを持って調査した結果の一部を紹介したい。

1．社会教育関係者のキャリアの基盤にある経験

調査は、ウェブによるアンケート調査により、広く社会教育に関わっている者を対象とした。社会教育関係者は多様で有益な経験をし、そのことが現在の地域の学習活動を促進する担い手としてのキャリア形成の礎となっているのではないかとの問いがそもそもの起点にあった。調査は２０２１年７月から９月の間に行われ１８５人の回答を得た。回答者は、社会教育主事の発令や資格の有無を問わず、社会教育領域に関わる教育委員会職員、学校教員、青少年

岩崎　久美子
（いわさき くみこ）
1962年宮城県生まれ。国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官を経て2016年4月より現職。
専門は成人教育学、生涯学習。
著書に、『国際バカロレアの挑戦：グローバル時代の世界標準プログラム』、『経験資本と学習：首都圏大学生949人の大規模調査結果』、『フランスの図書館上級司書：選抜－養成における文化的再生産メカニズム』など。

教育施設、公民館職員、博物館・美術館等の職員など多岐にわたる。また、身分も、行政職員、教員、NPO職員、指定管理者としての団体職員や嘱託職員など多様である。そのため、社会教育関係者といっても一律に語ることは難しく、その結果は精緻さに欠けるが、ここでは、いくつかの観点を紹介したい。

過去の経験に関する自由記述を見れば、学校での部活動への言及が一定以上あった。部活動は有意義な経験であることが多いが、学校以外での経験こそが世の中を知ることであり、社会教育としての経験につながると考え、それ以外の経験を取り上げ類型化した(1)。

(1) 自然体験や仲間との遊び

自然の中でお金をかけず工夫して楽しみ、ゆったりした時間の流れを感じさせられる経験の記述がある。たとえば、

「大学の仲間と、地方にある宿舎（セミナーハウス）に長期で宿泊し、川で泳いだりキャッチボールをしたり、バーベキューをして楽しんだ。お仕着せでなく自分たちの工夫で安価で楽しむ経験ができた。」（中学校教員後図書館勤務、男性、60代前半）などである。

小さい頃の自然や野外での経験が興味・関心を喚起し、大学でのフィールドワークや新たなことに挑戦できる力に結びついたとする者もいる。

「小中学生時代に野外で遊んだりスポーツをした経験を活かして、登山や生態学のフィールドワークを行っていた。また、ウクレレや民族楽器の演奏や自作を行っていた。」（科学館で講座企画・実施、男性、20代後半）、「小学生期・中学生期において、仲間と共に、自然に触れたり体を動かしたりする経験をたくさんした。これらの経験を通じて様々な社会事象への興味・関心が高まり、高校生活や大学生活において新しい分野に次々と積極的に挑戦することができた。」（県教育委員会（小学校教諭）、男性、40代前半）

仲間との一緒の思い出を「宝物」と表現する者もいる。時間は戻らないゆえに、気の合った仲間との一緒の活動は青春の貴重な思い出となっている。

「サークルの仲間と一緒に、本を読み、歌を歌い、お芝居をし、ドライブや旅行をしたたくさんの経験はいつまでも宝物です。」（公益財団法人職員・公民館の主催事業（講座）等の企画運営、女性、60代前半）、「高校では図書委員になり、休み時間や放課後に図書室に入り浸り、図書委員仲間と学年・性別を問わず、語り合っていました。また、高校から大学まで合唱部に所属し、日々歌っていました。「仲間」との協働体験にあふれた毎日でした。」（市子ども青少年所属社会教育主事、女性、50代前半）

(2) 社会教育関係団体での活動

ボーイスカウト活動を通じ、様々な経験をしたことが教職選択の決定因になった者もいる。

「私は小学校2年生から地域の児童養護施設が母体のボーイスカウトに入隊した。（中略）この間、ケイビング、カヌー（自作）、アマチュア無線、キャンプ、登山、ロープワーク等、BS活動の一環として様々な経験をさせていただいた。学校の担任にも恵まれたが（カブ隊に紹介してくれたのは、小学校1年生の担任）、ボーイ関係のリーダーにも恵まれた。教員になるか、社会教育主事になるかは、これらの経験がベースとなった。」（教育委員会教育長、男性、50代後半）。

高校時代の子ども会活動、大学時代の「冒険学校」などの社会教育団体による活動が人生の一部になっているとの記述がある。

「高校時代に学校外で子ども会活動にかかわることとなり、その後大学時代に「冒険学校」という活動にそのまま携わるようになり、経験を積むことができた。」（教育委員会事務局社会教育主事、男性、60代前半）

（3）事業の企画・実行

新しい企画を実行する企画力、実行力を発揮した経験に関する自由記述も多い。

「今思えば、小学生時代にゼロから企画するような機会が多く与えられていたので、高校や大学時代も、何もない中でも楽しめるようなアイデアを提案し仲間と一緒に形にして、日々を楽しく暮らしていたような気がします。」（市の社会教育施設専門の外郭団体、性別不明、40代後半）、「高校時代：ＬＨＲの企画を担当し、他のクラスでは実施しないことを企画し、仲間とともに実行した。・それまで休部状態だった部活動を、仲間とともに復活させた。大学時代：ソフトボール大会や夏祭り等を企画・運営した。・大学生協学生委員として：他大学の取組を視察し、助言を行った。」（市教育委員会事務局社会教育主事（中学校教員）、女性、40代後半）

（4）社会奉仕活動

高校や大学でのボランティア活動に言及している者も多い。ボランティア活動は世の中を知る入口であり、現在の仕事につながる貴重な知見を獲得していると推察される。

「ヒトとほかの生物の垣根なく、みんなの役に立つことがしたいと思って過ごしていた。色々なボランティアを積極的に探して参加していた（児童センター、植林、発展途上国むけ物資支援など）。」（科学館勤務、女性、30代後半）、「ハンセン病や児童養護施設でのボランティア／アルバイト」（教育委員会、男性、50代後半）、「大学内にボランティアセンターが無いことから、教員より打診があり、車椅子等の学生を受け入れるにあたり、車椅子のサポート等をするボランティアサークルを創立することとなった。さらに市が独自に市内の4大学と連携した4-rings というボランティアネットワークを組織することとなり、定期的な4大学のボランティア活動の取組や各大学でのボランティア啓発運動をボランティアサークルの立場として参画した。その他、大学2年時には民間のボランティア団体に所属し活動した。」（青少年教育施設職員、男性、30代後半）

（5）図書館を活用した読書経験

図書館を活用し本をたくさん読んでいる者も多い。読書は自分の世界を広げる手段でもある。

「とにかく本を読んだ。」（公民館職員（指定管理者）、女性、30代前半）、「高・大通じて読書の時間は多かった。高校時代は歴史小説や養老孟司や河合隼雄作品をたくさん読んだ。大学時代は、ゼミの課題や卒業論文の調べ学習のために大学の書庫にいることも多く、居心地がよかった。」（県社会教育行政（高校教員）、女性、40代後半）

（6）豊かな人間関係

さまざまな人と語り合う経験をしている。

「部活後に友達とよくラーメンを食べに行った。大学時代は大学の友人と運動したり、飲みに行ったり、旅行したりした。」（小学校教員、男性、40代前半）、「東京都心で育ったが、大学ではへき地活動をして地域の子どもや大人との交流を行った。また世界各国の代表と2週間にわたる合宿研修を経験した。」（ＮＰＯ法人、女性、65歳以上）、「祖父母との同居、親戚、近所の方々、たくさんの大人に関わりがあった。（中略）友達にも恵まれ、部活、サークル、勉強会、バイト、地元同級会、セミナー、様々なコミュニティが生まれた。老若男女、多様な方々と関わった経験が思い浮かぶ。」（市民センター社会教育主事（小学校教員）、男性、30代後半）

いずれの経験も楽しさや豊かさ、そして人間的な幅を感じさせられる内容である。

総じて、「それぞれの時期にそれぞれの場所に応じた経験を積んでいたように思う。幼小期の経験の組み合わせが今の自分を形

作っているのかもしれない」（公民館館長、男性、60代前半）との言葉が示すように、個々の経験は意識されずとも、それぞれの人となりやその後のキャリアを形づくっているのではないだろうか。

2．仕事への満足度

前述のとおり、対象を社会教育関係職員としたがさまざまな職種や立場の人がおり、その内実は異なる。そのことを前提にした上で現在の仕事の満足度を聞いた。

「非常に満足している」との回答は185人中23・8％であり約4分の1、「まぁ満足している」は58・4％であり、併せて約8割の人が満足しており、「あまり満足していない」、「まったく満足していない」といった不満足との回答は2割弱に留まる。仕事に満足していない人々は回答を忌避した可能性もあり、回答結果にバイアスがあることに留意する必要がある。その上で、現在の仕事に満足しているとの回答をした者は、どのような点に満足しているかを見てみたい。

（1）経験が生きる

「非常に満足している」とする回答の理由は、それまでの経験が仕事に生きることにある。

「小学校教師後、指導行政に長くいた。退職した今も指導行政に携わっている。これまでの職業人としての経験や知見が学校教育、社会教育（生涯学習）の両面に活かすことができている。」（教育委員会教育長、男性、50代後半）、「若いころは能力も経験もなく企画も通らなかったけれど、年齢と経験を重ねた分、自分の叶えたい企画を実現できる事柄が増えて行った為。若手への指導力など自分の至らなさを感じる事も多々あるが、就職したての頃より今の方が自分の思いを反映させやすいので満足しています。」（科学館職員（講座の立案・実施）、女性、40代前半）

（2）学びの仕事に従事すること

地域の人々のために学びを企画・運営する仕事であることへの満足度が高い。

「仕事を通して得られる知識・体験が多く、多分野の人脈を作ることができている。また、学びを実践に結びつけることができていることが主な理由」（県社会教育行政（高校教員）、女性、40代前半）、「これまでの自分の知識や経験が十分に生かすことができ、また、新たな学びや経験もできること。」（社会教育調査官、男性、50代前半）

（3）人間的な職場

社会教育は「顔が見える」職場である。さまざまな人との関わりが満足度を高めている。

「人との交わりが好きなことや、自分が関心あることも仕事につなげられ、やりがいがある職場だから。人間的な職場だから。」（公民館職員（主催講座担当）、男性、65歳以上）、「良いスタッフ、仲間がいるため。」（外郭団体（生涯学習機関での組織運営）、男性、40代後半）、「色々な人との関わりを実感できるため。」（公民館職員、女性、40代後半）

（4）思いの実現

自分のやりたい仕事に従事できており、自己実現をしているとの記述である。

「地域に根ざした青少年活動拠点の運営と地域学校協働活動を行うことができている。」（青少年の地域活動拠点運営 学校運営協議会会長・NPO代表理事、女性、65歳以上）、「自分の仕事が人の役に立てていると実感できることが多いから。」（小学校教員、男性、40代後半）、「地域の人と関わりながら、事業を展開ができ、とてもやりがいがあります。」（教育委員会（社会教育計画の策定など）、女性、40代後半）

一方、「やや満足している」との回答では、上記のような満足な面を述べた後、報酬や勤務時間などの待遇面での不満や、「まだまだ力不足や経験不足を感

じることがあるので、それを克服したい。」（公民館主事（団体職員）、女性、40代前半）、あるいは、「生涯学習に関わる仕事は興味深いが、コロナ禍のため、仕事が制限されているので。」（生涯学習相談員（嘱託職員）、女性、60代前半）などの現状にあって、十全の満足ではないとの内容になっている。

最後に、「あまり満足していない」、「まったく満足していない」とする2割弱の回答は、給与や休みなどの待遇、職場の人間関係、仕事の内容と自分の専門性やレベルとの乖離、仕事の将来性に言及する内容であった。嘱託職員なども回答者に含まれており、労働条件などが影響している可能性がある。

3．学習したい内容

社会教育関係職員の継続学習ニーズについて聞いた項目を見てみたい。「何か学んでみたいことがありますか。また現在、具体的に何かを学んでいますか」との質問項目では、「学んでみたいことがあり、実際に学んでいる」が55・7％、「学んでみたいことはあるが、実際には学んでいない」が40・5％である。本調査は、知人を介してや社会教育主事講習の受講生などを中心に依頼したため、バイアスがかかってはいるとは思われるが、学んでいる、いないとの違いはあるもの、ほぼ100％に近い者が「学んでみたいことがある」との前向きの回答である。それでは、どのような内容を学習したいと考えているのであろうか。

（1）管理能力

現在の職業において必要な「目標管理やタイムマネジメント」「助成金など事業資金獲得のための能力」「勤怠について」などの管理能力の向上、行政における規程の読み方や起案文書の書き方の研修を求める者もいる。あるいは、管理者としてか、「組織マネジメントや経営」「リーダーシップ講習」「リーダーの心構え」「コーチング」「若手職員のキャリア形成支援」なども挙がっている。「クレーマー対策」「危機管理」「ハラスメント」などの危機管理や、「メンタルヘルス」「ポジティブシンキングやモチベーションを維持するための考え方等メンタルコントロール」などのメンタルヘルスに関するものもあった。

（2）多様なスキル

具体的スキルとして、「ITパスポート」「業務効率化のためのPC技術」「オンライン研修の運営」「プログラミング教育」などのICT関連は最も多く、「簿記」「公益法人会計」「クラウドファウンディング」などの会計・経費関連、講座の企画や広報関連での「実践に役立つ学習支援法や企画立案の手法」「チラシ作成のためのデザインの基礎」や学習者との対応に関わる「アサーティブトレーニング、ボイストレーニング」「ファシリテーション技法」「ボランティアコーディネーション力」「カウンセリング技法」「プレゼンテーション能力」「相談活動に役立つ知識」「ロジカルシンキング」「アンケート調査・分析」といったものである。

（3）地域住民との連携

「市民自治」「市民活動と地域団体との連携」「地域協働」「地域づくり」「ソーシャルイノベーション研究」などの地域の連携等に関する学習や、「小中学生を対象とした防災教育の研修」「避難所の運営」「コロナ禍の中の生涯学習のあり方」など防災やコロナ禍に関するもの、「ユースワークのような若者支援」「専門的な自然体験（アウトドア）の知識や技術に関する研修（地元密着）」「読書活動を通して地域住民や地域生活の活性化を図れるような手立て」「郷土史」などが挙がる。

（4）社会的公正性

多様性や包摂性といった観点からの「異文化理解」「人権教育」「障がい者の生涯

学習」なども挙がっている。

(5) 事例

特記したいのは、社会教育の事例研修や関係職員間の情報交換に対するニーズが高いことである。たとえば、教育委員会社会教育主事からは「先進地の視察」、公民館職員からは「学校と地域の効果的な連携や他市等で行っている実例等」「公民館が地域づくりにどのようにかかわったのか事例報告」「若い世代の力になる社会教育活動の具体例」が挙がっている。また、「生涯学習に関わる取組の成功例やそれらにかかわる情報交換ができる研修」「コロナ禍の中、他の施設はどのように事業運営されているのか、工夫されていることを教えて欲しいです。」「NPOや博物館等様々な団体で活躍されている方とお話がしたいです。」「全国の社会教育士の養成や活躍事例について情報交換できるような研修」などの情報交換の機会を求める声もある。また、提案としては、「密回避にも繋がるので青空の下での研修を受けてみたい。」といったユニークなアイデアもあった。仕事上の学習の機会として、先進事例の把握や同業種の職員との交流を求めていることがわかる。この点においては、国や地方自治体での社会教育関係者の研修会や交流会などの意義は高く、広くその機会が望む人に届くことが重要であろう。

おわりに：キャリアの方向性

成人教育学の理論では、それまで蓄積された経験が成人になってからの学習のリソースであるとされる。成人の学習支援に関わる社会教育関係職員は、過去において、そして現在仕事を行う上で、意図的、無意図的、そして偶発的に学びの場を多く得ていると推察される。教育や学習の専門職であることは教育や学習を体現するということであり、教育や学習の持つ可能性や潜在性を信じる存在であることでもある。

現在、生涯学習政策の動向は、「人的資本論」に基づく雇用の確保・維持のための継続的学習に集約されつつある。学習を自発性や意欲に基づくものとして個人に委ねれば、学習に成功体験を持ち、経済的に恵まれた人びとが独学で学習を行うことに政策関心が集中し、恵まれない人々への補償教育や学習機会の提供といった社会正義や社会的公正性の視点は蔑ろにされていく。このことは外国の研究者などから近年指摘されてきていることである(2)。「社会的弱者や、マイノリティなど社会で少数派である人たちに生涯学習、社会教育を届けていくためにどうすればよいか学んでいきたいです。」（公民館職員（図書室担当）、女性、40代後半）との声は、社会的公正性を柱とする社会教育の本質を表していると思われる。

このことを考えれば、行政施策として真剣に検討されるべきことは、学習から零れ落ちていく層に対する「教育」という名の支援である。今回の調査を振り返ると、回答に協力した社会教育関係者の多くは多様な経験を踏まえ、学習の恩恵を体現している人々に感じられる。そのような人々が自分の経験を礎に専門性を高め、社会のセーフティネットを構築する原点として地域の人々の学習活動を鼓舞する支援を行うことは、社会教育関係者の使命のように感じる。魅力ある社会教育の担い手を特定し、地域にいる専門的人材の一層の活用や活躍を支持する行政や社会の見識が問われているように思われる。

注：
(1) 属性の職種は多様であるため、回答者による内容を表記した。
(2) たとえば、Maria Slowey and Hans G.Schuetze ed., 2012, *Global Perspectives on Higher Education and Lifelong Learners*, Routledge.